The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

瑩山禅師の無明観

加　藤　龍　興

1．問題の所在　本発表では，曹洞宗の太祖瑩山紹瑾禅師による思想解明の一端として，禅師による無明観の究明を文献学的な見地から試みるものである．瑩山禅師には，一般的に主著である『伝光録』を始め複数の著作が帰せられているが，思想の全容解明は充分にされ尽くされていないように思われる．本論では，この点を踏まえた試論として「無明（avidyā）」という術語に焦点を当てた用語概念の究明により，禅師が如何なる無明観を有していたのかについて考察してみたい．

2．当該箇所の提示　「無明」という語を含む該当部分を禅師の著述から抜粋する[1)]．

而して五蓋の煩悩は皆**無明**従り起る(1)．**無明**は己を明めざるなり．坐禅は是れ己を明むるなり(2)．縦い五蓋を断ずと雖も，未だ**無明**を断ぜざれば，是れ仏祖に非ず(3)．若し**無明**を断ぜんと欲せば，坐禅辦道は，最も是れ秘訣なり(4)．〔『坐禅用心記』（第九巻）pp.119–121 参照〕

世法を捨つること有りと雖も，仏法を捨つること無きこと有れば，是れ之れを空忍に住すとす．仏法を捨つるに似ること有るも，世法を捨てざること有れば，是れ之れを有縁を逐うとす．況んや**無明**に従うをや，況んや仏性に住するをや(5)．〔『信心銘拈提』（第五巻）pp.45–48 参照〕

又是れを辨ぜず，非を知らず，一向に声色を繫縛せられ，一切見聞に流落し，朦然として辨ずる無き，之れを喚んで**無明**と為す．之れに依って十二因縁断ずる無く，四生の群類免るる無し(6)．人人這箇有れども，世世覚知せず．個個本分に依れども，時時空しく競い求む．**無明酔裏親友に逢う**(7)．生死岸頭須らく対見すべし．〔『信心銘拈提』（第五巻）pp.157–160 参照〕

生死去来，愚人は縛著すると雖も，**無明煩悩**は是れ諸聖の所脱なり(8)．況んや声色の二辺，見聞の諸法，皆是れ衲僧の眼目，仏祖の光明なり．〔『信心銘拈提』（第五巻）pp.170–172 参照〕

已に迷悟と説く，早く好悪に落つ，豈に寂乱に非ざらんや．抑も迷いの正に迷いたる，是れを辨ぜず，非を知らず，仏を楽わず，生を厭わず，生死を恐れず，涅槃を求めず，是の時を名づけて実の**無明**と為す．是れ則ち諸仏衆生の根本，天地造化の本源なり(9)．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

〔『信心銘拈提』（第五巻）pp.187–189 参照〕

故に諸仁者無をも要すること勿れ．恐らくは落空亡の外道に同うしつべし．空劫威音に止まるべからず．亦是れ魂不散底の死人に似たり．妄法の空華を留めて，真実の本性に達せんと思うこと勿れ．却て是れ無明を断じ，中道を証する聖者に類す(10)．雲なき処に雲を起し，玭なき処に玭を生ず．恰かも伶俜他国の窮子なるべし，無明迷酔の貧客なり(11)．…是の如くなる故に，仏をして煩らわしく出世せしめ，祖師をして懇ろに垂誡せしむ．恁麼に垂誡して，手を垂ると雖も，尚お自己の知見に迷惑せられて，或いは不知と説き，或いは不今と説く．真個無明なるにも非ず，親切函蓋するにも非ず，徒に思量計較の中に在て，正邪を見別し来る(12)．〔『伝光録（第六章弥遮迦尊者章）』（第一巻）pp.223–227 参照〕

既に修多羅を誦すという．夫れ修多羅を誦すること，必ずしも口に誦し手に取て以て転経とのみすべからず．子細に仏祖の屋裡にして徒らに声色の中に功夫せず，無明胎中に行履せず(13)．処処に智慧発生し，時時心地開明して，須らく修多羅を誦すべし．〔『伝光録（第十章婆栗湿縛尊者章）』（第一巻）pp.321–323 参照〕

見ずや，今日の因縁を，有情といい無情といい，依報と分ち正報と分つこと勿れ．正に前生の比丘，今日木菌と作れり．木菌の時も我是比丘と作れりと知らず，比丘の時も我是万法と顕われたりと知らず．然れば今有情にして少しく覚知あり，聊か痛痒を辨ずと雖も，木菌と殊なることなし．所以如何となれば，木菌の汝を知らざること，豈に是れ無明に非ざらんや．汝が木菌を知らざることも，全く以て同じ．是れに依って有情無情の隔てあり，依報正報の品あり．若し自己を明めん時，何をか有情といい，何をか無情といわん(14)．古来今に非ず，根境識に非ず．能断なく所断なく，自作なく他作なく，大に須らく子細に参徹して，身心脱落して見るべし．〔『伝光録（第十六章羅睺羅尊者章）』（第二巻）pp.85–87 参照〕

其不覚と云うは，自己の根源を知らず，万法の生処を知らず，一切処に智慧を失う，之れを無明と名づく(15)．是れは思慮なく縁塵なし，是心本清浄にして余縁に背くことなし．此心の一変するを不覚と謂う，此不覚を覚知すれば自己心本清浄なり，自性霊明なり．是の如く明らめ得れば，無明即ち破れて，十二輪転終に空し(16)．四生六道速に亡ず．…其根本の無明既に破るるが故に，枝葉業報即ち存せず(17)．故に無分別の処に滞らず，不思量の際に拘らず，常住に非ず，無常に非ず，無明あるに非ず，清浄なるに非ず(18)．〔『伝光録（第二十章闍夜多尊者章）』（第二巻）pp.180–185 参照〕

汝等諸人辱じけなく仏の形儀を象どり，仏の受用を用いる．若し未だ仏心に承当の分あらずんば，十二時，自己を欺誑するのみに非ず，諸仏を毀破す．故に無明地を破ることなく，業識蘊に流浪す(19)．〔『伝光録（第五十二章孤雲懐奘禅師章）』（第四巻）pp.335–336 参照〕

…是れを知り覚りを開くるを仏と云う，此れを知らずは無明の酒に酔る衆生と云うなり(20)，…〔『洞谷開山和尚之法語』（第十巻）pp.84–88 参照〕

身前に相見し，身後曽て親し．密室投入の時いかん．無明の業識は鉄蒺莉なり(21)．一枝の梅花，洪外の春．〔『自賛』（第十巻）pp.248–249 参照〕

3．用例確認　前掲の当該箇所のうち共通性のある用例を項目別に簡明に纏め

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る．

3．1．「煩悩（五蓋）[2]」との関連性で述べられている箇所

下線部（1），（3），（8）が示される．『坐禅用心記』では五蓋の煩悩の因とされ，下線部（4）に記されているとおりその因である無明の滅却のために坐禅の必要性が強調される．これに対し，『信心銘拈提』では無明と煩悩の具体的な関係については述べられていない．

3．2．「己を明めない（自己の根源を知らない）」原因とされる箇所

下線部（2），（14），（15）等が挙げられ，『坐禅用心記』では己を明める方便として具体的に坐禅が指摘され，前述の煩悩の滅除のための坐禅と共通する．

3．3．「十二因縁」「四生」「業」等の発生要因とされている箇所

下線部（6），（16），（17），（19），（21）が該当するが，表現が各々多少異なり，（6）の「十二因縁」「四生の群類」，（16）の「十二輪転」「四生六道」，（17）の「業報」，（19）の「業識蘊」，（21）の「業識」と記されている．また，『伝光録』では「無明を破る」という特徴的な表現も散見される．

3．4．「根本」「本源」「胎」等と位置付けられている箇所

前項と重なる部分もあるが，下線部（9），（13），（17）が指摘され，無明が「諸仏衆生の根本，天地造化の本源」「胎」「枝葉となる業の根本」と位置付けられている．

3．5．「無明という酒で酔う」という喩えが用いられている箇所

下線部（7），（11），（20）が挙げられる．この譬喩は，『法華経』「五百弟子授記品」に遡源されると考えられ，その主旨は「本来具有する仏性に気付かず，迷妄している衆生」を譬えているとされるが，表現についてはそれぞれ若干異なっており，（7）で「無明酔裏親友に逢う」，（11）で「無明迷酔の貧客」[3]，（20）で「無明の酒に酔る衆生」とある．

3．6．取り上げなかった残りの箇所（下線部（5），（18））

下線部（5）は，『信心銘』の「**有縁を逐うこと莫れ，空忍に住すること勿れ**」の解釈で，「況んや無明に従うをや（どうして無明に従うであろうか）」とあるから，無明が「有縁（姿形ある世界）を追い求めること」等よりも根源的なものとされていることが窺われる．

下線部（18）は，文脈上直前の（17）との関係で考えると，「業の因たる無明が破れるから，無明はない」となり，一見不自然な記述にも看取される．そのため恣意的に解釈をすると，「業の発生因たる根本的な無明とは別の一般的な無明

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

(無知)」が，ここでは述べられているものと推察される．つまり二段階の無明が想定されていると見做されよう．

4．結語　以上甚だ簡潔だが，瑩山禅師の無明観の分析を試論として行った．各著述間で共通性のある事柄が確認されたことは，著者問題を再考する上でも注視すべきであろう．今後は道元禅師の無明観との対照等にも検証領域を広げ研究を継続していきたい．

1）『瑩山禪』（山喜房仏書林）全12巻を底本とする．引用の際は訓読文にし，原則として常用漢字を用いた．尚，「無明」という語は太字にし，この語を含む文に番号を付した下線を引き，強調のための傍点も適宜用いた．尚，下線部（1）～(21）で指摘した全21カ所が該当し，『坐禅用心記』（偽撰説もあるが本論では比較対象として用いる）の（1)～(4)，『信心銘拈提』の（5)～(9)，『伝光録』の（10)～(19)，『洞谷開山和尚之法語』の（20)，『自賛』の（21）で示される．

2）五蓋とは，貪欲蓋，瞋恚蓋，睡眠蓋，掉悔蓋，疑蓋を指す．

3）ここでは，下線部（10)，(12）と同様で，「落空亡の外道（空の一辺倒に執着する者)」への批判的見解の中で，この譬喩が使用されている．

〈キーワード〉　瑩山禅師，無明，『伝光録』，『坐禅用心記』

（曹洞宗総合研究センター研究員，博士（仏教学））

NII-Electronic Library Service